

親鸞の往生観

— 難思議往生を中心に —

村上無量

## 【凡例】

- 一、旧漢字・旧仮名遣いは、原則、現行のものに改めた。
- 一、原漢文のものについては、読み易さを考慮して、『真宗聖典』（東本願寺出版部）を参考に筆者が書き下した。和文のものについても『真宗聖典』を参照して、筆者が適宜整文した。
- 一、『顕浄土真実教行証文類』の引文は、『顕浄土真実教行証文類 翻刻篇』（東本願寺）に依った。
- 一、主な出典については、次のように略記した。
  - ・『定本親鸞聖人全集』（法藏館）↓『定親全』
  - ・『顕浄土真実教行証文類 翻刻篇』（東本願寺）↓『翻刻篇』
  - ・『真宗聖教全書』（大八木興文堂）↓『真聖全』
  - ・『浄土宗全書』（山喜房仏書林）↓『浄全』
  - ・『真宗聖典』（東本願寺出版部）↓『聖典』
- 一、人物への敬称は省略した。

## 一、はじめに

本論の目的は、親鸞がその身をもって明らかにした「難思議往生」の内実を尋ねることを通して、親鸞が「往生」を一体如何なる事実として捉えていたのかを確かめることにある。

周知のように、親鸞は「往生」をその内実において「難思議往生」・「双樹林下往生」・「難思往生」と明確に区別して了解する。その三往生の關係が親鸞自身の信仰告白として最も端的に述べられているのが、『顕浄土真実教行証文類』（以下『教行信証』）「化身土巻」のいわゆる三願転入の文である。そこでは、

是を以て、愚禿積の鸞、論主の解義を仰ぎ、宗師の勸化に依つて、久しく万行諸善の仮門を出でて、永く双樹林下の往生を離る。善本徳本の真門に回入して、偏に難思往生の心を発しき。然るに今特に方便の真門を出でて、選択の願海に転入せり。速やかに難思往生の心を離れて、難思議往生を遂げんと欲う。果遂の誓い、良に由有るかな。

（『翻刻篇』五四一—五四二頁）

と述べられているように親鸞は、「万行諸善の仮門」および「双樹林下往生」については「久出」や「永離」と述べ、「善本徳本の真門」および「難思往生の心」については「今特出」や「速離」と述べる。そして「難思議往生」については、その「方便の真門」を出て「選択の願海に転入」した「今」の自覚における「遂げんと欲う」という意欲として語るのである。つまり親鸞の立場は、どこまでも「双樹林下往生」や「難思往生の心」ではなく、それらを離れて「願海に転入」した「今」、「難思議往生を遂げんと欲う」という意欲にあると言える。<sup>(1)</sup>

このように親鸞が「難思議往生」を「遂げんと欲う」という意欲として述べるのは、自己（人間）の存在事実を徹底的に直視するからであろう。それは先の文の直前に、

悲しきかな、垢障の凡愚、無際より已来、助正間雑し、定散心雑するが故に出離其の期無し。自ら流転輪回を度に、微塵劫を超過すれども、仏願力に帰し巨く、大信海に入り巨し。良に傷嗟すべし、深く悲歎すべし。凡そ大小聖人・一切善人、本願の嘉号をもって己が善根とするが故に、信を生ずることあたわず、仏智を了らず。彼の因を建立せることを了知することあたわざるが故に、報土に入ること無きなり。

（『翻刻篇』五四一頁）

という悲歎が述べられていることから窺える。つまり、「助正間雑し、定散心雑する」や「本願の嘉号をもって己が善根とする」と言われるような人間の自力性は、完全に、あるいは永続的に拭い去られることはない。それは本願に目覚めた者も例外ではない。むしろ、本願に目覚めればこそ明らかにするのが、自力を離れない我が身である。そのような人間の存在事実への領きが、親鸞をして「難思議往生」を「遂げんと欲う」という現在進行形の意欲として述べさせたのであろう。どこまでも自力執心から離れられない我が身を場として、その自力執心を超え続けていかんとする意欲に本願を証していく歩み、そこに「難思議往生」という凡夫の仏道の実際があるのではないだろうか。

## 二、本願成就の仏道

親鸞は「難思議往生」を『浄土三経往生文類』において、

大経往生というは、如来選択の本願、不可思議の願海、これを他力ともうすなり。これすなわち念仏往生の願因

によりて、必至滅度の願果をうるなり。現生に正定聚のくらいに住して、かならず真実報土にいたる。これは阿彌陀如来の往相回向の真因なるがゆえに、無上涅槃のさとりをひらく、これを『大経』の宗致とす。このゆえに大経往生ともうす、また難思議往生ともうすなり。 (『定親全』三三・和文篇・二二頁)

と述べる。ここに明らかのように親鸞の言う「難思議往生」とは、『大無量寿経』(以下『大経』)に説かれる本願の因果力によって実現する往生である。具体的には、「念仏往生の願」に誓われる真実信心を因として「必至滅度の願果」である大涅槃を証得する「大般涅槃無上の大道」<sup>(3)</sup>であり、それは現生正定聚として実現する真実報土の往生を内実とするものである。

これが『大経』下巻の冒頭に、第十一必至滅度の願・第十七諸仏称名の願・第十八至心信樂の願の成就として説かれる本願成就文に基づく了解であることは論を俟たない。この三願のはたらきによって、衆生に「難思議往生」は実現するのである。よって、まずその本願成就文について確認したい。<sup>(4)</sup>

『大経』下巻から説き始められる本願成就文は、上巻の發起序において説かれる阿難と積尊との値遇、すなわち未離欲の凡夫である阿難が積尊を「今日、世尊、諸根悦了し姿色清淨にして光顔巍巍とまします」<sup>(5)</sup>と、現在する如来である仏の智慧を仰ぎ得たその意味を、法蔵菩薩の物語を通して本願の道理として明らかにしたものである。つまり、凡夫が凡夫の身のままに仏智を仰ぐという、常識からすれば考えられない不可思議なる体験の意味が、法蔵菩薩の本願が成就した事実として説かれているのである。その本願成就文は、

其れ衆生有りて彼の国に生るれば、皆悉く正定の聚に住す。所以は何ん。彼の仏国の中には、諸の邪聚及び不定聚無ければなり。

(『翻刻篇』三三三三頁)

と、まずもって第十一・必至滅度（証大涅槃<sup>6</sup>）の願の成就が説かれる。第十一願はその願名からも明らかのように、必至滅度や証大涅槃が誓われた願である。ここでは、その願の成就が浄土において「正定の聚に住す」という内容で説かれている。すなわち必至滅度や証大涅槃は、「住正定聚」という浄土の生として実現するのである。

親鸞は「滅度」や「大涅槃」を『唯信鈔文意』に以下のように述べている。

「涅槃」をば、滅度という、無為という、安樂という、常樂という、実相という、法身という、真如という、一如という、仏性という。仏性すなわち如来なり。この如来、微塵世界にみちみちたまえり。すなわち、一切群生海の心なり。この心に誓願を信樂するがゆえに、この信心すなわち仏性なり。仏性すなわち法性なり。法性すなわち法身なり。法身は、いろもなし、かたちもまします。しかれば、こころもおよばれず。ことばもたえたり。この一如よりかたちをあらわして、方便法身ともうす御すがたをしめして、法蔵比丘となのりたまいて、不可思議の大誓願をおこして、あらわれたまう御かたちをば、世親菩薩は、尽十方無碍光如来となづけたてまつりたまえり。

（『定親全』三・和文篇・一七〇—一七一頁）

この了解によれば「滅度」や「大涅槃」とは、「いろもなし、かたちもまします。しかれば、こころもおよばれず。ことばもたえたり」とされるように、人間の分別では決して理解できない仏の境界である。しかし同時に、それは「この如来、微塵世界にみちみちたまえり。すなわち、一切群生海の心なり」や、「一如よりかたちをあらわして、方便法身ともうす御すがたをしめして、法蔵比丘となのりたまいて、不可思議の大誓願をおこして、あらわれたまう」とも言われるように、「如来」として一切衆生の上に動的にはたらいっているものでもある。つまり「大涅槃」とは、法が法としての性質を保持しつつ、衆生の上に本願の名号としてはたらき出る、その能動的な法の力用そのものの

なのである。

だから親鸞は、その大涅槃を証する根拠を「願力の回向に籍りてなり」と本願力回向に見定めている。また、それによって衆生に実現するのが、「煩惱成就の凡夫・生死罪濁の群萌、往相回向の心行を獲れば、即の時に大乘正定聚の数に入る」<sup>(8)</sup>ことであると親鸞は言う。つまり、衆生が大涅槃を証し得るのは、どこまでも大涅槃の方が法蔵菩薩として衆生の上に本願の行信としてはたらし出るといふ本願力回向によるからである。その本願の行信を獲る一念に「大乘正定聚」といふ凡夫の身のままに大涅槃を証することが実現するのである。

そうであれば、この第十一願成就に続けて説かれる第十七諸仏称名の願成就と第十八至心信樂の願成就は、衆生の上に現行する大涅槃の具体相である本願の行信の成就に他ならない。

十方恒沙の諸仏如来、皆共に無量寿仏の威神功德不可思議なるを讚嘆したまう。<sup>(9)</sup> (『翻刻篇』一九頁)

諸有衆生、其の名号を聞きて信心歓喜せんこと乃至一念せん。至心に回向せしめたまえり。彼の国に生まれんと願すれば、即ち往生を得、不退転に住せん。唯五逆と誹謗正法とをば除く (『翻刻篇』一五五頁)

この諸仏称名の願成就と至心信樂の願成就は不離の関係にある。一切の諸仏如来が讚嘆する威神功德不可思議なる阿弥陀仏の名号を、「聞く」ところに信の一念は発起する。親鸞の原体験から言えば、「ただ念仏せよ」と本願の念仏を「善き人にも悪しきにも、同じように」<sup>(9)</sup>説き続けた法然の姿に、諸仏称名の具体相を見たことは想像に難くない。しかし、その諸仏称名の成就是、それを聞く衆生の信発起を離れてはあり得ない。「眞実の信心は必ず名号を具す。名号は必ずしも願力の信心を具せざるなり」<sup>(10)</sup>とも言われるように、衆生の「聞其名号 信心歓喜 乃至一念」に諸仏の称名は見出されるのである。だからこそ、親鸞は「行巻」で諸仏称名の願成就文と合わせて「東方偈」等の

文を引くことで、そこに衆生聞名の意義を明確に示すのであろう。<sup>(11)</sup>

それでは、その諸仏称名の願および至心信樂の願の成就として現行する本願の行信は、衆生において如何に自覚されるのであろうか。それを最も端的に言い表せば、

爾れば名を称するに、能く衆生の一切の無明を破し、能く衆生の一切の志願を満てたまう。(『翻刻篇』二一九頁)

という破闇満願の自覚であろう。しかしそれは、衆生の虚妄分別に根拠する自我欲求の満足を言うのではない。衆生が本能的に求めて止まない根源的欲求の満足であり、それは理知分別の無明が破られたところの自体満足である。だから破闇満願と言っても、衆生の無明煩惱がなくなり、何か衆生に不足しているものが与えられるといったことではない。与えられるのは、無明存在なる我が身の自覚の他に何もないのである。

このことは親鸞が、本願の名号を「大行」と顕揚し、その力用を海のはたらきに託して、

海と言うは、久遠より來、凡聖所修の雜修雜善の川水を転じ、逆謗闡提恒沙無明の海水を転じて、本願大悲智慧  
 眞実恒沙万徳の大宝海水と成る、之を海の如きに喩うるなり。(『翻刻篇』二二四頁)

と述べることから確かめられる。これに鑑みれば、破闇満願の自覚とは「凡聖所修の雜修雜善の川水」という人間の自力や「逆謗闡提恒沙無明の海水」といった人間の身に満ちている無明煩惱が、「本願大悲智慧眞実恒沙万徳の大宝海水」へと転成せしめられた事実なのであり、それは無明煩惱の身こそが本願を実験する当体であったという目覚め、すなわち願海転入の自覚に他ならない。また『高僧和讃』にも同様のことが、

無碍光の利益より 威徳広大の信をえて かならず煩惱のこおりとけ すなわち菩提のみずとなる

罪障功徳の体となる こおりとみずのごとくにて こおりおおきにみずおおし さわりおおきに徳おおし



と詠われている。このように、衆生の煩惱具足の身を離れて弥陀の本願はないのである。

さらに親鸞は、その「転成」に合わせて、

願海は、二乗雑善の中下の死骸を宿さず。何に況や人天の虚仮邪偽の善業雑毒雑心の死骸を宿さんや。

〔翻刻篇〕 二二四―二二五頁

と、「不宿」のはたらきを述べる。この「不宿」は、願海そのものが真実清浄であらんとするはたらきであると同時に、願海に転入した者に開かれる仏道の歩みを支えるはたらきである。つまり、本願に目覚め（願海に転入し）てもなおおむことのない自力執心を常に否定し続けるのが「不宿」というはたらきであって、衆生はその否定を契機として常に本願を我が身に証していけるのである。だから実際にあるのは、無明煩惱の身という絶対無救済の存在事実だけである。しかし、その事実が目覚めて見れば、目覚めさせるはたらきとして如来大悲は衆生の自覚の上に顕現する。このように称名信樂の悲願成就として衆生の上にはたらき出る本願の行信とは、無明煩惱の闇に覆われて本来あるべき姿を忘れている衆生をして、その無明の闇を転じ、常に本来性（大涅槃）を回復せしめんとする如来大悲の力用なのである。よって、衆生の立場から言えば、あるのはその無明存在である自己への目覚め、すなわち「煩惱具足の凡夫、火宅無常の世界は、よろずのこと、みなもつて、そらごとたわごと、まことあることなき」<sup>12)</sup>という徹底した凡夫の自覚だけである。そこに如来大悲は、求めずともすではたらいている。それを本願成就文に返して言えば、諸仏が称名する弥陀の名号を聞信する一念（凡夫の自覚）に、「至心に回向せしめたまえ」る如来大悲は顕現し、その回向によって「願生彼国 即得往生 住不退転」という仏道を「唯除」され続ける身のままに歩むということである。

以上のように、第十一必至滅度の願・第十七諸仏称名の願・第十八至心信樂の願の成就として説かれる本願成就とは、大涅槃が法蔵菩薩として立ち上がり、衆生の分別を突き破って自覚の上に本願の行信として名告り出ることである。だからこそ衆生は、その本願の行信の獲得に正定聚に住し、凡夫の身のまま必至滅度・証大涅槃が実現すると言い得る。それを親鸞は『大経』の仏道の核心として、「現生に正定聚のくらいに住して、かならず眞実報土にいたる」と述べるのである。

### 三、願生浄土

先述したように、難思議往生は本願成就として衆生に実現する仏道である。具体的に言えば、大涅槃の方が本願の行信として衆生の上に現行して行くことによって実現する証涅槃道であった。よって、その核心が我が身の存在事実の自覚、すなわち本願の行信の獲得にあることは疑う余地もない。そこに住正定聚の生として、「願生彼国 即得往生 住不退転」という願生浄土の仏道は開かれる。それでは、その仏道の歩みにおける具体的な営為は如何なるものなのであるか。それは『教行信証』の方法論からも窺えるように、本願成就の事実にとってその因願を探るという聞思の営為であると私は考える。親鸞は、そのような営為を通すことによつて、実際に本願を我が身に自証していかんとする。それこそがまさに親鸞が眞実報土の往生として明らかにしようとした仏道の内容であると考えられる。その営為の核心が「信巻」の三一問答である。よつてここでは三一問答を確かめることを通して、本願成就の信心に開かれる仏道の具体性を明らかにしたい。

そこで今一度、第十八願成就文を見てみたい。

諸有衆生、其の名号を聞きて信心歡喜せんこと乃至一念せん。至心に回向せしめたまえり。彼の国に生まれんと願すれば、即ち往生を得、不退転に住せん。唯五逆と誹謗正法とをば除く  
 (『翻刻篇』一五五頁)

親鸞は、衆生の一心と如来の三心との関係を三一問答において明らかにしている。そのとき、この本願成就文を二分して了解する。その前半部分である「所有衆生 聞其名号 信心歡喜 乃至一念」の文を、至心釈を受けた後の信楽釈に「本願信心の願成就文」<sup>(13)</sup>として、また後半部分である「至心回向 願生彼国 即得往生 住不退転 唯除五逆 誹謗正法」の文を、欲生釈に「本願の欲生心成就の文」<sup>(14)</sup>として引用する。このことから、親鸞は衆生に發起する本願成就の一心に、二つの側面を見ていると言える。それは、一つには「本願信心の願成就」として、信心が涅槃の真因である(信心に大涅槃が超証される)ということ、二つには「本願の欲生心成就」として、信心そのものの展開において衆生の仏道が成り立つ金剛心<sup>(15)</sup>ということである。

このように親鸞が本願成就文を二分して了解する背景に、世親の『無量寿経優婆提舍願生偈』(以下『浄土論』)があると考えられる。世親は『大経』に帰依した自身の信心を、

世尊我一心 帰命尽十方 無碍光如来 願生安楽国  
 (『真聖全』一・二六九頁)

と、「尽十方無碍光如来」への「帰命」と「安楽国」への「願生」を内実とする「我一心」として表明する。そして、その一心願生の信に自証された「安楽国」を、二十九種の願心莊嚴の浄土として讃嘆していくが、その結びを見ると、  
 普く諸の衆生と共に 安楽国に往生せん  
 (『真聖全』一・二七〇頁)

とある。つまり、「我」に發起した「一心」(特に願生心)に安楽国は開かれ、そこに願心莊嚴の浄土という意味が見

出されてみれば、願生心は「我」一人の自覚に止まらず、「普く諸の衆生と共に」「往生せん」という意欲へと必然的に展開するのである。換言すれば、一心帰命の信が一心願生へと展開するからこそ、そこに往生という仏道が衆生に成り立つのである。

その一心帰命から一心願生へと展開する信心の能動性を、親鸞は如来因位の法蔵菩薩の願心、すなわち至心・信楽・欲生の三心に見定め、それらが如何にして自身の自覚の上に表現されてくるのかを究明している。紙幅の都合上、それらを事細かに論じていくことはできないので、本願成就文を二分して了解する親鸞の思索に注目し、要点を押さえる形で見ていきたい。

まず「至心」について親鸞は、

一切の群生海、無始より已来、乃至今日今時に至るまで、穢悪汚染にして清浄の心無し。虚仮諂偽にして真実の心無し。是を以て如来、一切苦悩の衆生海を悲憫して、不可思議兆載永劫において菩薩の行を行じたまうし時、三業の所修、一念一刹那も清浄ならざること無し、真心ならざること無し。如来、清浄の真心を以て円融無碍・不可思議・不可称・不可説の至徳を成就したまえり。如来の至心を以て、諸有の一切煩惱・悪業・邪智の群生海に回施したまえり。則ち是れ、利他の真心彰わす。故に疑蓋雜わること無し。至心は則ち是れ、至徳の尊号を其の体と為るなり。

〔翻刻篇〕一八八—一八九頁

と了解している。これは「至徳の尊号」をその体とすると言われてるように、聞名（一心帰命）の信にまず開かれる自覚であり、それは清浄心・真実心が全くないという徹底した懺悔である。その懺悔を通して自覚されるのが、清浄・真実のない一切衆生を悲憫して、常に清浄・真実であらんとする法蔵菩薩の永劫修行である。ここでは、その衆

生と如来の関係が「是を以て」と接続されているように、衆生の「穢悪汚染にして清浄の心無し。虚仮諂偽にして真実の心無し」という存在事実こそが、如来を法蔵菩薩として立ち上がらせ「不可思議兆載永劫において菩薩の行を行じ」させ名号にまで成らせたのである。だから、その名号に帰した自覚は、我が身の懺悔であると同時に、一切衆生の苦悩に身を捨てた法蔵菩薩のご苦勞への讃嘆でもある。だから、その自覚は「一切の群生海」という主語で語られているように、個人を超えた一切衆生に共通する如来が見抜いた普遍的事実なのであり、そこに群萌の大地とも言うべき平等普遍なる地平は開けるのである。

この至心の了解を受けて、親鸞は「信楽」を、

次に信楽と言うは、則ち是れ、如来の満足大悲・円融無碍の信心海なり。是の故に疑蓋間雑有ること無し。故に信楽と名づく。即ち利他回向の至心を以て信楽の体と為るなり。然るに無始より已来、一切群生海、無明海に流転し、諸有輪に沈迷し、衆苦輪に繫縛せられて、清浄の信楽無し。法爾として真実の信楽無し。是を以て無上功德、値遇し難巨く、最勝の淨信、獲得し難巨し。一切凡小、一切時の中に、貪愛の心常に能く善心を汚し、瞋憎の心常に能く法財を焼く。急作急修して頭燃を灸うが如くすれども、衆て雑毒雑修の善と名づく。亦、虚仮諂偽の行と名づく。真実の業と名づけざるなり。此の虚仮雑毒の善を以て無量光明土に生まれんと欲する、此れ必ず不可なり。何を以ての故に。正しく如来、菩薩の行を行じたまうし時、三業の所修、乃至一念一刹那も疑蓋雜わること無きに由てなり。斯の心は、即ち如来の大悲心なるが故に、必ず報土の正定の因と成る。如来、苦悩の群生海を悲憐して、無碍広大の淨信を以て諸有海に回施したまえり。是を利他真実の信心と名づく。

と了解している。この「信樂」は如来の「満足大悲」の心であり、その大悲心によって衆生に發起する「信心海」である。その如来の大悲、あるいは信心の自覚内容が、「一切群生海」の在り方を徹底的に否定することをもって述べられ、最終的にはそのような存在の浄土往生の絶対否定にまで達する。そして、その絶望的とも言える否定を潜って、改めて法蔵菩薩の永劫修行が述べられる。そのとき注意すべきが、「何を以ての故に」という接続詞で述べられていることである。「至心」では「是を以て」と接続されていたように、清浄・真実なき衆生を見ぞなわして如来が清浄・真実なる心をもって、衆生に回施することが述べられていた。しかし「信樂」においては、衆生が絶対に救われない理由として、法蔵菩薩の永劫修行が述べられるのである。そこには救われない衆生を如来が救うという道理すら否定し尽くされる。その衆生が無意識の内に想定している自己肯定・自己是認の立場を徹底的に否定するのが如来の大悲心なのである。よって、その絶対否定の自覚がそのまま如来の大悲心に包まれた証拠であると言えよう。つまり如来との決定的な断絶において、衆生は如来と一つとなる。だからその絶対否定を潜った真信心こそが「必ず報土の正定の因と成る」と親鸞は断言するのである。

この至心・信樂を受けて親鸞は、「本願信心の願成就文」として、

經に言わく、諸有の衆生、其の名号を聞きて信心歡喜せんこと乃至一念せん、と。已上（『翻刻篇』一九七頁）と、本願成就文の前半部分を掲げる。つまり、これまで確かめた至心・信樂の自覚が「本願信心の願成就」の内容であり、それに続けて『涅槃經』の引文によって信心仏性論を展開し、<sup>16</sup>「或は阿耨多羅三藐三菩提を説くに、信心を因とす。是れ菩提の因、復無量なりと雖も、若し信心を説けば、則ち已に撰尽しぬ」と結ぶこと<sup>17</sup>から、その本願成就の信心が涅槃に直結している道心であることを証明するのである。換言すれば、この至心・信樂の自覚内容が、涅槃に

包まれた感動の表現であると言ってもいいだろう。また、このような思索は「真仏土巻」との関係にも見出せる。その一例を挙げれば、「真仏土巻」に浄土（涅槃界）の性として引用される『無量寿経優婆提舍願生偈註』（以下『論註』）の性功德の「諸法平等なるを以の故に発心等し。発心等しきが故に道等し。道等しきが故に大慈悲等し。大慈悲は是れ仏道の正因なるが故に」という文を、親鸞は「信巻」の一念転釈において、「諸法平等」を「願海平等」と読み替えて示すこと<sup>(19)</sup>で、浄土の性と信心の性が共に法蔵菩薩の大慈悲心に基づいていることを明かすのである。それによって、煩惱具足の凡夫の身のままに獲信の一念に真実報土の正因（涅槃の真因）を得ることができ、より積極的に言えば、真実報土あるいは大涅槃が開示されることを述べるのである。それが本願信心の願成就の内容である。

そして、そのような信樂における如来との決定的な断絶に必然する仏からの原理を親鸞は「欲生」として、

次に欲生と言うは、則ち是れ如来、諸有の群生を招喚したまうの勅命なり。即ち真実の信樂を以て欲生の体と爲るなり。誠に是れ、大小・凡聖・定散・自力の回向に非ず。故に不回向と名づくるなり。然るに微塵界の有情、煩惱海に流転し生死海に漂没して、真実の回向心無し、清浄の回向心無し。是の故に如来、一切苦悩の群生海を矜哀して、菩薩の行を行じたまうし時、三業の所修、乃至一念一刹那も回向心を首と爲て、大悲心を成就することを得たまえるが故に。利他真実の欲生心を以て諸有海に廻施したまへり。欲生即ち是れ廻向心なり。斯れ則ち大悲心なるが故に疑蓋雜わること無し。

（『翻刻篇』二〇八—二〇九頁）

と述べるように、「我が国に生まれんと欲え」と「諸有の群生を招喚したまうの勅命」として聞き取っている。だからそれが衆生の自力の回向ではないとして「不回向」と言われるのは当然の理であろう。ここで親鸞がすぐさま本願力回向とは言わずに「不回向」と示すのは、本願力回向はどこまでも衆生の自力の回向が否定されるところに見出さ

れる事実だからである。不回向を潜らぬ本願力回向は、単なる理想に過ぎない。また、ここでは回向が「回向心を首と為て、大悲心を成就することを得たまえる」と言われるように、「心」の字が加えられていることにも注意が必要である。言うまでもなく、この文は『浄土論』・『論註』にて示される言葉に依拠するのであるが、そこに「心」の字はない。<sup>(20)</sup>そこに親鸞が敢えて「心」の字を加えるのは、回向を五念門の行の一つとしてではなく、如来の願心そのものとして了解するからであろう。すなわち回向心とは、外在的なはたらきではなく、衆生に内在する根源的欲求の「心」、「一切群生海の心」として真実を求めさせて止まない如来の願心なのである。

その「欲生」の願心は、第十九至心発願の願と第二十至心回向の願にも誓われている。親鸞はそれらを「化身土巻」において「既にして悲願有ます<sup>(21)</sup>」として、どこまでも虚仮不実なる衆生を包摂せんとする悲願と仰いでいる。それは、徹底した我が身の自覚に見出された、衆生が如何なる存在（邪定聚の機・不定聚の機）であろうとも、どこまでも如来に背く衆生の迷いの身と一つとなつて、常に「我が国に生まれんと欲え」と叫び、衆生を本来あるべき姿へと呼び帰さんとする如来の願心である。だから、この欲生の願心は第十九願・第二十願に誓われる機の問題や第十八願の成就文においても「唯除」が説かれる意味を確かめることで、より明確になると考えられる。

さて、その欲生を受けて言われるのが、「本願の欲生心成就」である。ここでは前述したように、

經に言わく、至心回向したまえり。彼の国に生まれんと願ずれば、即ち往生を得、不退転に住せんと。唯五逆と誹謗正法とを除く、と。已上  
 （『翻刻篇』二〇九頁）

と、本願成就文の後半が引かれる。つまり、本願の欲生心成就として衆生に開示されるのが、「回向したまえり」という欲生心に根拠する「願生彼国 即得往生 住不退転」という願生浄土の仏道である。しかし、親鸞はその「願生」



を『一念多念文意』において、

よろずの衆生、本願の報土へうまれんとねがえとなり。

(傍線筆者 『定親全』三・和文篇・二二七頁)

と、「欲生」と同質の注釈を施している<sup>22)</sup>。このことから、欲生心が衆生の上に願生心として成就するということは、衆生が如来招喚の勅命を聞き、娑婆から浄土へ「生まれんと願う心」が起こるということではない。そのような人間の雑じった「願生」は「為楽願生」であり、そこに求められる浄土は化土であると親鸞は断言する。そうではなく、如来の欲生心に根拠する「願生」とは、そのような為楽願生の心さえも否定して、「本願の報土」から招喚する勅命としてそのまま衆生の上に表れ出るのである。だから、衆生の虚妄分別を突き破って表れ出たところの願生心にこそ、本願の報土・真実報土は開かれるのである。

親鸞は「真仏土巻」において、

謹んで真仏土を按ずれば、仏は則ち是れ不可思議光如来なり。土は、亦是れ無量光明土なり。然れば則ち、大悲の誓願に酬報するが故に真の報仏土と曰うなり。既にして願有ます。即ち光明寿命の願是れなり。

(『翻刻篇』三九一頁)

と述べるように、「真仏土」を第十二光明無量の願・第十三寿命無量の願に根拠する「不可思議光如来」・「無量光明土」という「光」として確かめている。しかしそれは、

其れ衆生有りて、斯の光に遇う者は三垢消滅し、身意柔濡なり。歓喜踊躍し、善心生ず。三塗勤苦の処に在りて此の光明を見ば、皆休息を得て復苦惱無けん。寿終えての後、皆解脱を蒙る。

(『翻刻篇』三九二―三九三頁)

と述べられるように、衆生が憧憬し求めるような外在する固定化された理想ではない。「三塗勤苦の処」に在りなが

らも「三垢消滅」等の功徳を實際に受けたところに自覚される本願の智慧の「光」である。だから、この「光に遇う」ということは、本願の智慧によって苦悩の根源である自己の無明性が照らされることなのであり、照らし出されてみれば煩惱具足の凡夫の身こそが仏や浄土を本願の智慧として証する場であったと、その意味が根本から翻されるのである。そこに「これでよかった」と現在の我が身に安住せしめられるのである。

この仏や浄土の方から開かれる自覚に立つことが、まさに「願生彼国 即得往生 住不退転」の仏道の事実なのであり、現生正定聚の生の内容なのである。よって、願生心に「即得往生 住不退転」として実現する真実報土の往生とは、衆生の不実性を照らし出す当体としての「うまれんとねがえ」という如来招喚の勅命（本願の智慧）を、迷いの身に聞き抜くことの他にない。その我が身の事実を聞く信心に、真実報土は自然に開かれるのである。自己の迷いを離れて真実報土や如来はない。

それでは、その願生心に開かれる真実報土の往生とは、具体的に一体如何なるものであるのだろうか。それを「証卷」に引かれる浄土の莊嚴功徳に尋ねていきたい。

#### 四、現生正定聚の自覚

親鸞が「証卷」に引用する浄土の莊嚴功徳は、二十九種の内の妙声功徳・主功徳・眷属功徳（大義門功徳<sup>(23)</sup>）・清浄功徳の四種のみである。親鸞がこれらの浄土の莊嚴功徳を「真実証」を頭かにする「証卷」に引用する意図はどこにあるのだろうか。

まず妙声功德である。

『浄土論』に曰く、「莊嚴妙声功德成就」は、偈に「梵声悟深遠 微妙聞十方」の故にと言えりと。此れ云何ぞ不思議なるや。『経』に言わく、「若し人、但彼の国土の清淨安樂なるを聞きて、剋念して生まれんと願ぜん者と、亦往生を得る者とは、即ち正定聚に入る。」此れは是れ、国土の名字仏事を為す。安んぞ思議すべきや、と。

(『翻刻篇』三三四—三三五頁)

これは一見して明らかのように、「梵声悟深遠 微妙聞十方」という名号の徳が「仏事を為す」と讃嘆されている。その名号が為す仏事とは、名号を聞き得た願生者および得生者を正定聚に入れるというものである。つまり、聞名即入正定聚ということである。しかし、注意しなければならないのが、「剋念して生まれんと願ぜん者と、亦往生を得る者とは、即ち正定聚に入る」と親鸞は読んでいるが、本来であれば「剋念して生ぜんと願ずれば亦往生を得て則ち正定聚に入る」と読まれる個所である。従来の読みでは、願生して往生を得て正定聚に入る（願生↓往生↓正定聚）と、どこか段階的な歩みとしても読めるが、親鸞は願生者も得生者も共に名号の徳によって「即ち正定聚に入る」と読むのである。ここで親鸞が「往生を得る者」と読み、わざわざ得生者にまで言及するのは、名号に帰した者の「本願の嘉号もつて己が善根とする」という問題（不定聚の機）を見据えているからではないだろうか。ここに「正定聚」の具体相があるように思う。すなわち、得生の事実にすら執着していく人間の問題やそれに付随する化土往生が、名号によってどこまでも否定されていくところに「即ち正定聚に入る」のであり、その事実全体を親鸞は眞実報土の往生として領いたのである。

更に言えば、親鸞は妙声功德を『一念多念文意』において、

安樂浄土の不可称・不可説・不可思議の徳を、もとめずしらざるに、信ずるひとにえしむとしるべしとなり。

〔定親全〕三・和文篇・一三二—一三三頁

と註釈しているように、名号によって浄土の功徳が信心の利益として「もとめずしらざるに」与えられることであると了解している。その人間が「求めていない」あるいは「知らない」浄土の徳とは、まさに「不可称・不可説・不可思議」とあるように「不可」という如来の智慧による理知分別の否定である。だから、その否定を潜ったところに実現する真実報土の往生は、人間からすれば「難思議」と言わざるを得ない。実際に我が身に証し得た事実であるにもかかわらず、人間が考え得る理屈の範疇を超えている。それを「難思議往生」と親鸞は言うのであろう。

その内実が、まず「梵声悟深遠 微妙聞十方」という妙声功徳をもって語られるということは、如来の智慧たる名号を聞信する一念に「即ち正定聚に入る」ことが難思議往生の起点である、ということである。さらに言えば親鸞は、難思議往生に立ったという事実から、自己をして「即ち正定聚に入」らしめた如来の智慧を、妙声功徳として讃嘆しているのではないだろうか。

次に主功徳が引かれる。

「莊嚴主功徳成就」は、偈に「正覚阿弥陀 法王善住持」の故にと言えり。此れ云何が不思議なるや。正覚の阿弥陀、不可思議にまします。彼の安樂浄土は、正覚阿弥陀の善力の為に住持せられたり。云何が思議することをべきや。「住」は不異不滅に名づく。「持」は不散不失に名づく。不朽葉を以て種子に塗りて、水に在くに蘭れず、火に在くに焦がれず、因縁を得て即ち生ずるがごとし。何を以ての故に。不朽葉の力なるが故なり。若し人、一たび安樂浄土に生ずれば、後の時に意、三界に生じて衆生を教化せんと願じて、浄土の命を捨てて願に随いて

生を得て、三界雑生の火の中に生まると雖も、無上菩提の種子畢竟じて朽ちず。何を以ての故に。正覚阿弥陀の善く住持を径るを以ての故にと。  
 (『翻刻篇』三三五―三三六頁)

ここでは、浄土が阿弥陀仏の住持力によって成り立っているから、その浄土は「不異不滅」・「不散不失」であることが述べられる。またその浄土の生を得たものは、「浄土の命を捨てて」「三界雑生の火の中」において「衆生を教化せん」という意欲(生きがい)を賜ることが言われている。つまり難思議往生とは、個人的な一過性の体験に止まるものでもなければ、超越の世界に生まれるといった理想論でもない。どこまでも三界雑生の娑婆に身を置きつつ、浄土を背景としてその娑婆を担い生き抜いていくこととして果たされていく。その生は、一個人の主観に閉じ籠った狭いものではなく、一切衆生と共にという公性をもった開けた生である。それは世親が「普共諸衆生 往生安楽国」と述べるが如くである。これが阿弥陀仏の住持力によって成り立つ正定聚の生の内容である。

その一切衆生と「共に」という正定聚の生が、ここでは「教化」という具体性をもって語られている。この「教化」は、対他的な布教を指すものではなく、自信教人信の誠を尽くすことであると私は考える。それはどこまでも如来の大悲に支えられた、自身が本願に生きんとするところに本願そのものの弘がりとして成り立つ教化である。

この「自信教人信」は、善導の『往生礼讃』に依拠する言葉である。ここでは、

自ら信じ人を教えて信ぜしむること、難きが中に転た更た難し、大悲を伝えて普く化する、真に仏恩を報ずるに成る。  
 (『真聖全』一・六六一頁)

と述べられている。これを親鸞は「信巻」において「正定聚の機」を明らかにする真仏弟子釈に引用するが、そのとき「大悲を伝えて普く化する」の箇所を「大悲、弘く普く化する」と読み替える<sup>(25)</sup>。このように親鸞が「大悲弘普化」と

読むのは、「弘く普く化す」ということが「大悲」によって成り立つと了解するからであらう。

その弥陀の大悲による「弘普化」の具体相が、釈尊の教化（善知識の教え）である。それは、

弥陀の弘誓の力を蒙らずは、何れの時・何れの劫にか娑婆を出でんと。乃至 何んが今日宝国に至ことを期せん。  
 實に是れ娑婆本師の力なり。若し本師知識の勧めに非ずは、弥陀の浄土、云何してか入らんと。

（『翻刻篇』二四一頁）

と述べられていることから明らかである。すなわち「教化」とは、「弥陀の弘誓の力」（化）及び「娑婆本師の力」（教）であると言えよう。だから衆生の立場は、その「教化」を「受ける」というところにはしかない。しかし、その二尊の「教化」に生き抜く姿が、また他者を「教化」するのではないか。それは「ただ念仏」に生きる法然の姿に、親鸞が弥陀の本願を信受し得たように、あるいは親鸞の念仏者としての生涯がそうであったように、娑婆における法難や批判、あるいは善鸞事件といった数々の問題の中にありながらも、それらを逆縁として本願の念仏だけが真実であると、自らが信じた「ただ念仏」の教えを他者との関係性の中で生き抜いていくこと、ここに自信教人信の実際があるのではないか。

それがここで言われる阿弥陀仏の住持力によって成り立つ「教化」であり、それは三界の娑婆において他者との関係性を「共に」という志願のもとに生き抜いていくことである。その三界雑生を独立者として生き抜く力を阿弥陀仏は住持するのである。またそこに成り立つ関係性が、続く眷属功德（大義門功德）の文によって、浄土の眷属として明らかにされていく。

その眷属功德（大義門功德）は、

「莊嚴眷屬功德成就」は、偈に「如来淨華衆 正覺華化生」の故にと言えり。此れ云何ぞ不思議なるや。凡そ是れ雑生の世界には、若しは胎、若しは卵、若しは湿、若しは化、眷屬若干なり。苦樂万品なり。雑業を以ての故に。安樂国土は、是れ阿弥陀如来正覺淨華の化生する所に非ざること莫し。同一に念仏して別の道無きが故に、遠く通ずるに夫れ四海の内皆兄弟と為るなり。眷屬無量なり。焉んぞ思議すべきや。

又言わく、往生を願う者、本は則ち三三三の品なれども、今は一二の殊無し。亦、溜瀝 食陵の反の一味なるがごとし。焉んぞ思議すべきや。 (『翻刻篇』三三二六―三三七頁)

と述べられる。このように浄土を背景とした三界における他者との関係性は、「同一に念仏」する本願念仏の僧伽という意味が見出されることに他ならない。それは、胎・卵・湿・化という様々な生まれの違いや、また業の違いよって受ける苦樂の違い、あるいは「三三三の品」と言われるような人間の機質の違いを超えた平等な関係である。

本来、人間は「世間の愛欲の中に在りて、独り生じ独り死し独り去り独り来りて、当に行いて苦樂の地に至り趣くべし。身自ら之に当たる、代わる者有ること無し」と説かれるように、絶対的に孤独な存在である。しかし、その孤独な身をもって三界を生きているという宿業存在の事実こそが、一切衆生に共通する平等性なのである。だから、そのような存在に浄土の徳として念仏の僧伽が開かれるということは、どこまでも孤独である存在事実<sup>(27)</sup>に独立者という意味が与えられ、お互いがお互いに独立者として「共に在る」という自覚が与えられることに他ならないのである。それがここでは、「同一に念仏して別の道無きが故に、遠く通ずるに夫れ四海の内皆兄弟と為るなり」という浄土の功德として確かめられているのであろう。どこまでも自我に固執し絶対的孤独を生きる者にとって、これほどまでに具体的な救済の実感が他にあるだろうか。だからこそ親鸞は、この眷屬功德の文を「真仏土卷」において、

往生と言うは、『大経』には「皆受自然虚無之身無極之体」と言えり。已上『論』には「如来浄華衆正覚華化生」と曰えり。又は「同一念仏して無別の道故」と云えり。已上 又、難思議往生と云えるなり。

（『翻刻篇』四六〇頁）

と述べているように、真実報土の往生の証文として掲げるのではないか。つまり、難思議往生という現生正定聚の生における最も具体的かつ現実的な浄土の功德が、この念仏の僧伽が開かれるという眷属功德なのである。

そして最後に、

又『論』に曰く、「莊嚴清浄功德成就」は、偈に「観彼世界相 勝過三界道」の故にと言えり。此れ云何ぞ不思議なるや。凡夫人の煩惱成就せる有りて、亦彼の浄土に生まるることを得れば、三界の繋業畢竟じて牽かず、則ち是れ煩惱を断ぜずして涅槃分を得。焉んぞ思議すべきや。已上抄要

（『翻刻篇』三三七—三三八頁）

と、清浄功德の文を引くことよって、これまで確かめてきた現生正定聚の内容、すなわち浄土を背景にしながら三界を三界のまま、凡夫の身を凡夫の身のまま生き抜いていく生が、「煩惱成就の凡夫人」として「勝過三界道」に立ち、「煩惱を断ぜずして涅槃分を得」という涅槃道であることが押さえられるのである。ここに『浄土論』において浄土の莊嚴功德の総相とされる清浄功德が、妙声功德・主功德・眷属功德（大義門功德）を引いた後に引かれる所以があるように思われる。

ここで今一度、これまで述べてきた真実証である難思議往生の内実を踏わす浄土の莊嚴功德を整理したい。まず妙声功德が引かれることによって、難思議往生の内実が「即ち正定聚に入る」という現生正定聚として確かめられていた。それは如来の智慧である名号を聞信する願生者および得生者に「しらずともめざるに」浄土の徳が与えられる



ことであつた。次に主功德が引かれ、その現生正定聚の生が、「教化」という内容で展開されていた。しかしそれは、対他的なものを言うのではなく、三界の中にありながら独立者として一切衆生と「共に」本願の念仏に生きんとする阿弥陀仏に住持された意欲・志願を生きることである。その「共に」という意欲が、続く眷属功德では、本願の念仏の僧伽として展開される。それは単なる宗派といったセクト的な意味での僧伽を言うのではなく、絶対的孤独という宿業存在の事実裏打ちされた真の平等性への領きである。そのような三界や煩惱の身を担っていく生の全体が、清浄功德の引文によって大涅槃に支えられた得生の事実として確かめられていくのである。

このように願生心に開かれる眞実報土の往生（難思議往生）とは、どこまでも「煩惱具足の凡夫、火宅無常の世界」という現実において、具体的に浄土の功德を自証していく大般涅槃道なのである。

## 五、おわりに

これまで確かめてきたように、親鸞の立脚する「難思議往生」とは、『大経』に第十一必至滅度の願・第十七諸仏称名の願・第十八至心信樂の願の成就として説かれる仏道であり、それは大涅槃の方が衆生の上に本願の行信としてたらしき出ることによって実現するのであつた。だから、衆生においては、その本願の行信を獲得するところに難思議往生の仏道は必然する。つまり、難思議往生の仏道の核心は本願の行信の獲得にあると言える。よつて本論では、その本願の行信の獲得の一念の自覚内容を「信巻」三二問答に尋ねた。そこで明らかになつたのは、如来との決定的な断絶の自覚（本願信心の願成就）がそのまま如来の大悲心の顕現であり、そこに法蔵菩薩の一切群生海を招喚

する勅命は聞き取られ、その欲生心に根拠する願生浄土の仏道が開示される（本願の欲生心成就）ということであった。それはどこまでも招喚の勅命に随順する歩みであり、凡夫の自覚に立ち返ることによって、そこに常に法蔵願心を我が身に自証していかんとする主体的な歩みである。その願生心にこそ眞実報土は開かれるのであり、それを親鸞は現生正定聚として「証卷」に引く浄土の莊嚴功德によって、その具体性を示していた。それはどこまでも娑婆を娑婆として煩惱成就の凡夫の身のままに生き抜いていくことの他になかった。しかし、その凡夫の自覚に本願は実験され、そこに眞実報土は莊嚴されるのであるから、そのような生は涅槃道という意味を持つのである。そのような自覚的歩みを親鸞は「難思議往生」と述べるのである。

本論では、親鸞が「難思議往生」を今現在の自覚として述べることに注目した。そのため「双樹林下往生」や「難思議生の心」については詳しく触れることができなかった。しかし、親鸞が「難思議往生」を「遂げんと欲う」と述べていることは看過してはならない。つまり「難思議往生」は、今現在の自覚でありつつも、果たし遂げられいく歩みなのである。そこで重要となるのが、第十九願・第二十願である。それは邪定聚の機・不定聚の機とされるような永遠に自力性を離れ得ない絶対<sup>(28)</sup>に救われない我が身の存在事実こそが本願を聞思していく道場（浄土方便化身土）として領かれ、第十九願と第二十願が自身をして常に仏道に立たしめる如來の方便として、「仮令の誓願、良に由有るかな」乃至は「果遂の誓い、良に由有るかな」と仰がれるのである。そのことを明らかにする際に必要不可欠となるのが、「還相回向」という理解ではないだろうか。

## 【参考文献】

- ・曾我量深 『曾我量深選集』 彌生書房・一九七〇—一九七二年
- ・寺川俊昭 『寺川俊昭選集』 文栄堂・二〇〇八—二〇一三年
- ・幡谷 明 『浄土三経往生文類試解』 東本願寺出版部・一九九二年
- ・安田理深 『教行信証証卷聴記』 文栄堂・一九九六年
- 『純粹未來—真実証について—』 文栄堂・一九九四年

## 【参考文献】

- ・東 真行 「親鸞の往生観—往生と正定聚の交流—」 『真宗研究』 第六〇輯・二〇一六年
- ・小川直人 「現生正定聚—撰取不捨の視点から—」 『真宗教学研究』 第三十二号・二〇一一年
- ・小野蓮明 「現生正定聚の境位」 『大谷学報』 六十二卷・第三号・一九八二年
- ・加来雄之 「入願海—方便化身土を開顕する意義—」 『真宗研究』 第五十六輯・二〇一二年

## 注

- (1) この三願転入の文における親鸞の時制表現については、加来雄之の「入願海—方便化身土を開顕する意義—」（『真宗研究』第五十六輯）に詳しい。
- (2) ここで示されている「念仏往生の願」は、単に第十八願のみを示しているのではなく、第十七諸仏称名の願の意も含まれていると思われる。それは、この直後に第十七願文が挙げられ、その成就文が第十八願と合わせて「称名信楽の悲願成就の文」とされていることから明らかである。（『定観全』三・和文篇・二二—二二頁参照）
- (3) 『翻刻篇』二二三頁
- (4) 本論で引用する本願成就文は、すべて『教行信証』各卷（「行卷」・「信卷」・「証卷」）に示される親鸞の訓点に従う。
- (5) 『真聖全』一・四頁

- (6) 第十一願を「証大涅槃の願」と呼ぶ根拠は、『無量寿如来会』に「若我成仏、国中有情、若不決定成等正覚証大涅槃者、不取菩提」(傍線筆者『真聖全』一・一九〇頁)と説かれていることにある。
- (7) 『翻刻篇』三八二頁
- (8) 『翻刻篇』三三二頁
- (9) 『恵信尼消息』・『定親全』三・書簡篇・一八七頁
- (10) 『翻刻篇』二二五頁
- (11) 同箇所引用される『仏説諸仏阿弥陀三耶三仏薩樓仏檀過度人道経』、『無量清浄平等覚経』、『悲華経』の文にも衆生聞名を説く内容が見られる。(『翻刻篇』一九一―二八頁参照)
- (12) 『定親全』四・言行篇・三八頁／『聖典』六四〇―六四二頁
- (13) 『翻刻篇』一九七頁
- (14) 『翻刻篇』二〇九頁
- (15) 信心獲得に開かれる仏道の歩みにおいては、その信が「金剛心」(本願力回向の信心)であるということが非常に重要な意義を持つ。なぜなら、獲信後の歩みの中に「如来よりたまりたる信心を、わがものがおに、とりかえさん」(『定親全』四・言行篇・一〇頁)とするような人間の現実問題があるからである。ここに本願成就においても唯除が説かれなければならないかった所以がある。つまり「金剛心」とは、人間の理想として語られる確固たる信念ではなく、どこまでも人間の現実問題に則して衆生を撰取(唯除)せんとする如来の願心の性質なのである。だからこそ親鸞は、欲生心積の中で善導の二河譬を注釈するときに「能生清浄願心」と言うは、金剛の真心を獲得するなり」(『翻刻篇』二二三頁)と、「往生」の語を抜くのであろう。言わば「金剛心」とは、衆生が獲得するものではあっても、衆生を根拠に起こり得る(能生)ものではないことである。また、それが「菩提心」として展開されることに鑑みれば、「金剛心」とは自利利他成就を課題とする大乘仏教の精神そのものとも言えるだろう。
- (16) 『翻刻篇』一九七―二〇〇頁参照
- (17) 『翻刻篇』二〇〇頁

- (18) 『翻刻篇』四三三頁
- (19) 『翻刻篇』二二七—二二八頁参照
- (20) 『浄土論』では起観生信章（『真聖全』一・二七一頁）に、またそれを註釈した『論註』下巻の文（『真聖全』一・三二六頁）に示されている。
- (21) 『翻刻篇』四六六頁／五一六頁
- (22) 「欲生」は、『尊号真像銘文』において、「安樂浄土に生まれんとおもえとなり。」（『定親全』三・和文篇・七四頁）と注釈されている。
- (23) この大義門功德については、眷属功德の後に「又言わく」と功德名が挙げられずに連引されていることに鑑みて、本論では大義門功德は親鸞が眷属功德の内容として見ているものとして了解する。
- (24) 『浄全』二四三頁
- (25) 『翻刻篇』二四二頁
- (26) この読み替えは、智昇の『集諸経礼懺儀』の「大慈弘普化」（『大正新修大藏经』第四十七卷・四六九頁）との言葉に依ったものであると考えられる。
- (27) 『真聖全』一・三三二頁
- (28) 『翻刻篇』五一〇頁

（村上 無量 大谷大学大学院文学研究科博士後期課程第三学年 真宗学専攻）